「被災者支援の4年と今後」

数字でとらえきれぬ復興 住民の話聞くことが原点

人々の絆ますます大事に 自分守る力育てる教育を

震災直後、福島県郡山市の「ビッグパレットふくしま」（県産業交流館）は原発事故から逃れた2500人以上が集まり、最大規模の避難所になっていた。そこに運営責任者として県から派遣されたのが天野和彦さん、支援に駆けつけたのが中越防災安全推進機構の稲垣文彦さんだ。「おだがいさまセンター」など4年間の活動を振り返り、被災者支援の課題を話し合ってもらった。【聞き手・冠木雅夫専門編集委員、写真・藤井達也】

―震災後にお二人がビッグパレットに入ったのはどういう経緯でしたか。

天野 2011年の震災直後は相馬市の避難所で運営支援をしていました。4月9日に県の災害対策本部に呼ばれ、ビッグパレットで運営責任者をしてくれと指示された。厳しい状況でノロウイルス患者も出ていて死人が出るかもしれないという。富岡町、川内村の役場の人も限界だと。それで11日に県庁の支援チームとして入りました。

稲垣 私は新潟県長岡市で支援のバックアップをしていましたが、3月末に内閣府のボランティアの会合があり、NPOの仲間から、福島に行ってほしいと頼まれた。政府の現地対策本部で、大規模避難所が大変なので民間の知恵を借りたいと言われて現地に行って、11日午前に天野さんと出会ったわけです。

天野 どんな状態の人がどこにいるか把握してほしいと救護班の会議で頼んでも動いてくれない。そこで災害看護で有名な黒田裕子さん（阪神高齢者・障害者支援ネットワーク理事長、14年9月死去）が発言したんです。「名簿を作るのは医療の仕事じゃないと、私がいつ皆さんにお教えしましたか。それが命を守ることにつながる」と、すごい調子なので驚きました。そしたら反対していた医師が「喜んでお手伝いさせていただきます」と言ってくれた。一つのターニングポイントでした。

稲垣 いろんな職種の方が活動していましたが、横のつながりがなかった。医療福祉の関係が経験上一番難しいと思ったので、黒田先生に1日だけ来てもらったんです。

天野 何から手を着けようかと思っていたら、稲垣さんが中越から若い人を呼ぼうと言う。サロンを作り、「足湯」をしてお話を聞くことを始めた。あれがまた大きかったですね。

―避難者の交流と自治を掲げた「おだがいさまセンター」はどういう経緯で？

天野 ボランティアが大勢来てくれていたからさばく仕組みも必要だろうし、避難者の生活支援の仕組みも必要だと思いました。稲垣さんと一緒に富岡町長、川内村長に会い了解してもらったんです。「お互い様」というのは見返りを期待するギブ・アンド・テークではありません。日本中に通じる精神だと思っています。

稲垣 避難所で安全に生活するだけでなく、お互いに役割を持って支え合うことをきっかけに再建が進んでいく。それが多少できたのかもしれません。

―支援の課題について4年間で変化はありましたか。

稲垣 本質的には何も変わっていないと思います。震災だけの被災地だと、被災した1分1秒後から再建の道が刻まれていくと思いますが、福島ではまだ刻まれていない。それと、本当に一人一人で状況が違っていて一くくりにはできない。

天野 震災関連死は、岩手、宮城では亡くなった方の8％ぐらいですが、福島の場合は50％を超えています。故郷に帰れるのか帰れないのか、帰れるとしたらいつなのか、もやもやとしたままいろんな感情を抱えている。原子力災害の深い影が震災関連死を生んでいるわけです。その根っこの部分は全く変わっていない。まさに心の復興が福島の課題だと思います。

稲垣 新潟の自主避難の方々も変わっていません。むしろ時間がたつにつれてより複雑になっている。まだまだ孤独に避難している方がいる。避難したことが正しかったのかと悩んでいる。それぞれの思いを抱きしめて話を聞いていかないといけない状況です。避難区域からの人も、何を失ったのかを話し切れていない。富岡から来た人が「富岡の青い空をなくした」と言っていましたが、大きな喪失感があるのです。

―これからの支援は、どうしたらいいでしょうか。

稲垣 福島の問題は数字でとらえてはいけないと思います。県外避難の人が県内に戻る、仮設住宅の人が復興公営住宅に入る。それで数字が減れば復興が進んだというんですが、問題を押し込めているだけで何も変わっていない。もちろん、そうせざるをえない部分はあるので全否定はしないですが、やはり、住民の話をしっかり聞けていないことが根本だと思います。比喩的に言えば、もう一回、原点に返って「足湯」から始めるべきだと思います。お互い心を開いて、もう一回いろんな話をしていただき、聞いていく。

天野 確かに役所は数値目標をあげて、避難者がどれだけ減ったのかを数で見るということはあります。一方で、おだがいさまセンターでは生活復興支援と言って人のつながり、絆を重視してきました。4年を経てますます大事になっています。

―今後の課題について付け加えることがあれば。

天野 福島の子どもたちを大人たちが守っていくこと、これも大事です。もう一方で、福島に対するいわれなき差別がないわけではない。例えば結婚についてそういう話も聞く。そんなことがあったとき、子どもたちが自分たちで自身を守っていける力を付けてやらなければいけない。教育の大きな課題です。

稲垣 これだけ苦労し、いろんなことを考えたお子さんだから、他人にはやさしい大人になるでしょう。お子さんは親が思う以上にしっかりしています。親御さんは、重荷を負わせたとは思わないでほしいし、お子さんをひとりの人間として信じてほしい。

稲垣 文彦さん

中越防災安全推進機構
復興デザインセンター長

いながき・ふみひこ　1967年新潟県長岡市生まれ。2004年10月の新潟県中越地震からの復興のため05年5月、中越復興市民会議を創設し事務局長に。10年現職。中山間地域の集落支援員や東日本大震災の復興支援員の育成を進める。ながおか市民協働センター長。共著に「震災復興が語る農山村再生」。

天野 和彦さん

福島大特任准教授
前おだがいさまセンター長

あまの・かずひこ　1959年福島県会津若松市生まれ。特別支援教育に15年携わる。震災後避難所を運営し2014年3月まで同センター長。12年4月福島大うつくしまふくしま未来支援センター特任准教授・地域復興支援担当。共著に「生きている 生きてゆく ビッグパレットふくしま避難所記」。

おだがいさまセンター

福島県郡山市のビッグパレットふくしまに避難した富岡町、川内村などの住民を支えるため、2011年5月1日に発足した「生活支援ボランティアセンター」の通称。着替えや授乳ができる「女性専用スペース」や喫茶コーナーを設置、敷地内の除草、花植え、夏祭りや情報紙発行、ミニFM局「おだがいさまFM」などの活動を行った。

同年8月末の避難所閉鎖後も活動を続け、翌12年2月に同市富田町の仮設住宅敷地内に新築移転。富岡町社会福祉協議会が運営し、「交流と自治」「生きがいと希望づくり」などを掲げて活動。年間2万人が利用している＝写真。

(c)毎日新聞社　無断転載、複製を禁止します。